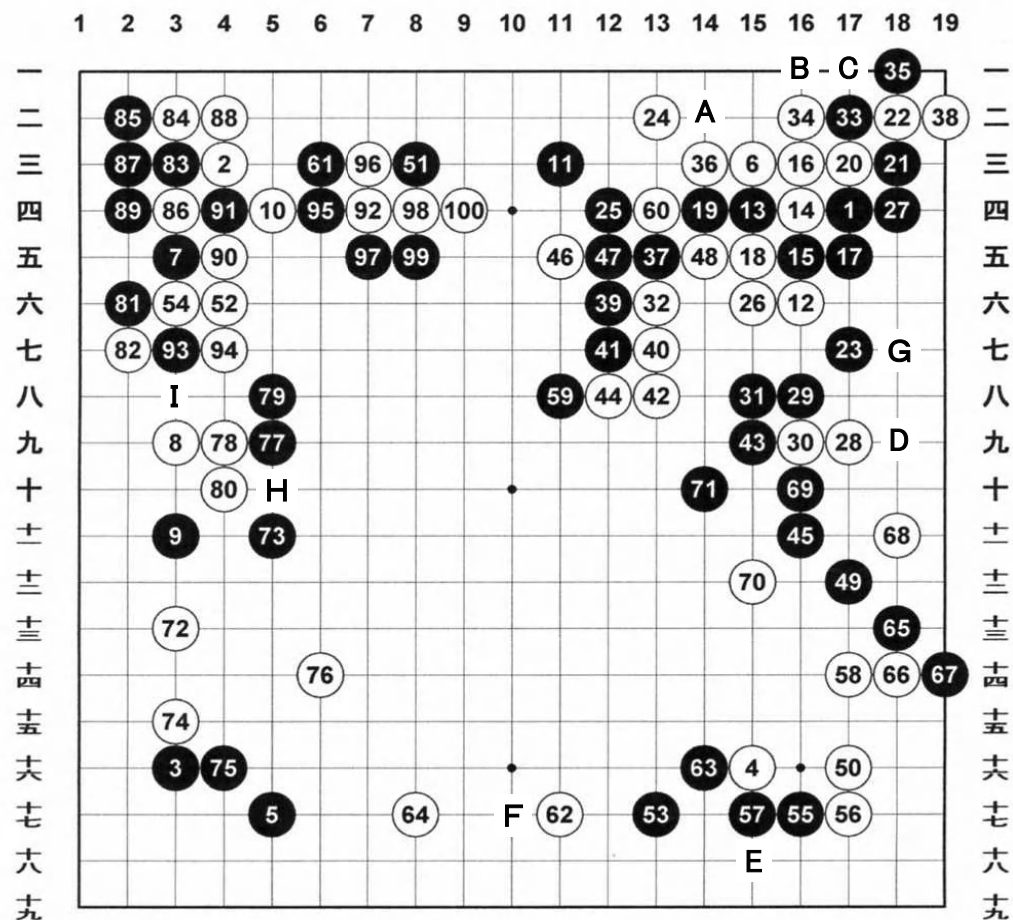


第一譜 1 - 100

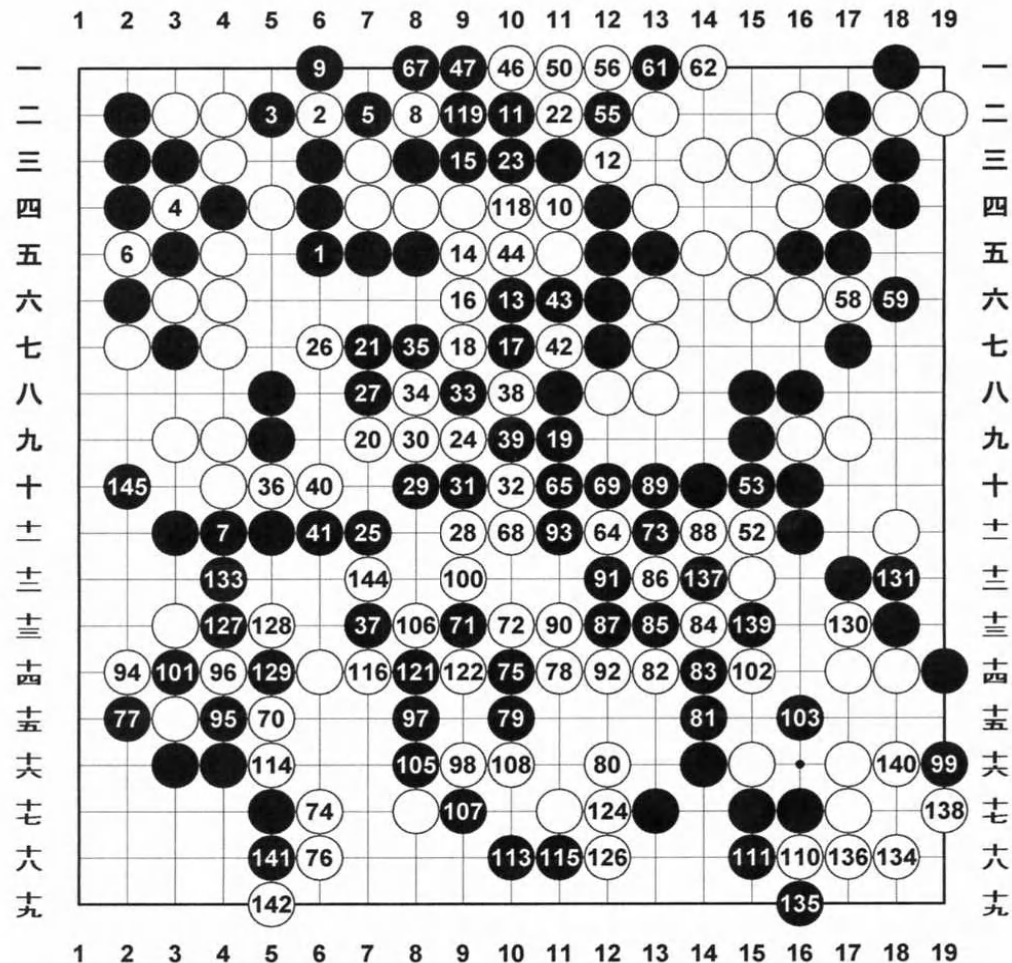


「悲運の棋士、赤星因徹を並べてみよう（吐血の局／赤星因徹（先）・本因坊丈和）」

天保(1835)6年7月19日、21日、24日、27日 於：松平周防守宅 丈和：49歳、因徹：26歳

白12からは開発されつつあった型で、黒33、35は「井門の秘手」だったという。
 白36で38は黒36白A黒Bのコウ。また白36でCも黒38でコウだ。
 白44では先に白Dと三本サガリで上下にワタリ筋があった。
 1日目の打ち掛け後、丈和がこの碁を門弟に並べて見せたとき、秀和少年(のちの十四世本因坊)がその手順を指摘し、丈和は不機嫌になったという。
 黒49と二子を取って優勢だが、黒57ではEのコスミがまさと、秀甫(十八世本因坊)の評。
 黒61は下辺Fの大場を占めるところと岸本左一郎(坊門、1822から1858)の説がある。
 白64で細碁。
 白68、70、80が「三妙手」として知られる。白68、70はここで先手を取って左辺にまわる意図。
 黒71を手抜きは、白Gと動かれて味が悪い。黒73では88とツケてヨせてよく、黒79では80が簡明。
 白92ではHが厚く、黒95でIと出て生きるのは上辺の黒が苦しい。
 強引な白の手に、黒は次第に追い詰められていく。

第二譜 1 - 146 (101 - 246)



45コウ取る(33)48同49(42)51コウ取る(33)5457606366各同104
 同(77の右)109112117120123各同125ツグ(77の右)132コウ取る(96)
 143同(33)

一日目59手、二日目99手で打ち掛け。三日目に入っている。
 黒71はやや無理で、白8以降は丈和ペース。白20が勝着だ。
 三日目は白172手で打ち掛け。当時打ち掛け時期は白が指定していたが、あえて黒に手番を渡した。白の優位は動かない、という意思表示と解されている。
 因徹は投了と同時に血を吐いて倒れた。対局中に昂進していた肺結核が、気力の支えを失ったのだ。一ヵ月後、悲劇の棋士は他界する。
 この対局にあたり、丈和の妻は浅草観音にお百度を踏み、因碩側は某寺に内密に依頼して不動明王に護摩を修してもらったという。
 因碩の名人への野望は頓挫した。246手完、白中押勝